

短編小説 四

土師 猛

「五億の瞳に恋をして」

一柳瞳。彼女から突然メールが届いてから三週間にしろうとしている。

今仕事で、カンヌにいます。明後日、関西空港行の便に搭乗します。帰国したら一週間程、別荘でリフレッシュしたいと思います。私の心と身体を癒して下さる、知性と教養溢れる方を探しています。貴方ならきっと私の願いを叶えていただける方だと、サイトの紹介でメールを送りました。私は、今年四十二歳を迎えます。年収は五億円あり、毎年高額所得者番付に載っています。でも仕事だけの孤独な一人暮らしで、男も恋も遠い過去になってしまっている可哀相な女です。私のラブストーリーの相手になっていただけないでしょうか。

との内容で、写真も添えてあった。私は彼女の美貌とお金に魅せられ、即座に快諾の返事をした。それから何度もお互いを知りあう

メールを重ねた。彼女は淀川区に住んでいて映画関係の仕事をしている事。また私の芸術観と、彼女の映画に対する考えは共通点が多い事も知った。そして帰国の日には、次のようなメールを送ってきた。

私を癒してくれる人は、あなたしかいません。あなたとの別荘での一週間を想像すると私の身体はもう濡れています。あと数十時間で愈々お会い出来るのですね。

これを最後に、彼女とのメールは途絶えたままになっている。私が淡く夢見た——五億の瞳に恋をして——の一柳瞳さんは、どこに消えたのだろうか。私はネットという幻の世界で、実在しない彼女の性とお金を求めて彷徨っていたのだろうか。航空事故のニュースもなく、時差を考えるとさらにおかしい。出会い系サイトは、ほとんどヤラセである事に目覚めたのは最近になってであった。